

臨床心理学的視点を理解するために 視覚的媒体を用いること

恒 吉 徹 三

Using of Visual Materials on Understanding the View Point of Clinical Psychology

TSUNEYOSHI Tetsuzo

(Received May 15, 2002)

キーワード：臨床心理学的視点，カウンセリング，視覚的媒体，精神分析学

I はじめに

“こころ”をどのようなとらえるかには、さまざまな立場がある。心理学を基礎とする臨床心理学は、他の領域の影響をさまざまに受けている。筆者は、臨床心理学の立場からカウンセリングを行っているが、無意識という意識とは異なる側面や動機が存在することを認める精神分析学に基づいてクライアントを理解し、心理学的な援助を行っている。この精神分析学は、Freudにより創始され、現在では、古典的なフロイト派、自我の構造や防衛機制や外界への適応を重視する自我心理学の立場、自己と対象との関わり方を重視する対象関係論の立場、コフトらの自己心理学の立場などがある。このように変遷してきた精神分析の特徴として次の4つの点が上げられている（北山，1991）。①無意識を認めること，②言葉で取り上げること，③力動論，④過去の観点から理解する，というものである。この立場は、ひとの行動の背景には、無意識的な動機づけがあり、現実や社会的なルール、自らの内的な規範と、願望との折り合わせが行われて、表立った言動や問題行動として表現されているという視点から理解する立場であり、心の中のさまざまな力関係の「妥協の産物」（Freud, 1907）として人の言動をとらえている。

このような立場から心を理解する場合にはなおさらのこと、表現された行動という現象面を記述的に理解するわけではなく、その対象はより一層目には見えない世界であり、そのメカニズムということになる。しかし、全く目に見えないというだけでは、理解することも困難であり、言葉や遊び、絵や映画や物語などの媒体を通して理解することになる。特に、このような媒体を用いることは、カウンセリングというプライバシーの保護が重要となる領域を、その守秘義務を侵すことなく示すことができるという利点がある。さらに、カウンセリングで語られるのは「人生をどのように思い出し、そして語るかにつきあっている私たちにとっては、実際に何があったかという歴史的な事実よりも、それがどのような印象で語られていて、今も生きられているか、という個人の神話としての過去のほうが重要なのである。」（北山，2001）と指摘されているように、個人のこころに出来事がどのように映り、そして、どのように語られるかが重要であることが示されている。この観点から、過去の母子関係の描写としての浮世絵に関する研究もすすめられている。他にも、こ

ころを理解するための素材として用いられてきたものはさまざまである。また、Freudは、こころの構造論などのモデルを提示したが、フロイトの用いた図や用語の多くは「メタファー」であったという指摘（Spence,1987）もある。つまり、こころは直接に取り出してみることができるものではなく、何らかの置き換えが必要なのである。

筆者は、心について臨床心理学的な視点からの理解を深めるために、いくつかのビデオや物語について示し、講義における学生の理解支援の視覚的素材としての意味を検討することを本稿の目的とする。

Ⅱ 事項とその理解のための素材

1. こころの深層と発達を理解する：思春期心性とその危機

『千と千尋の神隠し』（宮崎駿，2001）は10歳の女の子を主人公とした物語である。この物語はさまざまな視点からみることができるが、ここでは心の仕組みやその発達を理解するための素材として検討する。実際の講義では公式ホームページの画像や絵本（徳間書店刊）を利用している。この物語は、住み慣れた土地や仲間からの別れ、つまり対象喪失から始まる。映画では、両親と主人公の千尋が車に乗って、新しい家へと引っ越しをしている車中の場面から幕を開ける。この場面では、主人公の千尋は友達からもらったであろうメッセージの添えられた花束を不満げな様子で抱えている。主人公の年齢の10歳前後の時期は、「前思春期」としてそれ以前の児童期や思春期そのものとは別のものとして位置づける立場もある。思春期へと至り親への依存や権威から離脱し新たな対象を発見する第2次分離个体化期（Blos, 1967）の準備期ともいえる時期である。また言い換えると、子どもから大人への『移行期』でもある。

次の場面では、丘の上にある新しい住まいへと行くために父親は近道をしようと小道へと入ると、古びた建物が見えてくる。車を降りて建物の中から続く長いトンネルを抜けると、目の前に広大な別世界が広がっている。さらに、水のない川を渡ると向こう岸には町がある。ここで重要なのは、こちらの世界とあちらの世界との間は、トンネルによってつながれ、さらにその先にある川（初めは水のない川であるが、時間がたつと水が満ちて船でなければ移動できなくなる）とによって、しっかりと隔てられ、またつながれていることである。つまり、ここに心の内と外とその間のあることが描かれていると理解することができる。この内と外の間部分は、Winnicott（1971）が中間領域として描き出した世界としても理解できる。向こうの世界（心の内）には、両親さえ食欲のままに食物を貪る「貪欲な豚」として表現されている。これは人間としての両親の中にある、普段の千尋では見ることのできなかつた貪欲な側面を、豚として表現しているものとして理解することもできる。映画の中では、豚に変わり果てた親の姿を親としてみることができずに逃げ出すという設定になっている。物語の終わりになると、何頭もの豚の中から自分の両親の姿を見つけ出すことができるまでに成長を遂げた姿として描かれている。

この過程は、親の貪欲さという側面について受け入れることができたことで、親の良い面と貪欲さに代表されるような悪い面という2面性や、幼児期的で絶対的な権威や依存の対象であった両親像を、両面を備えた対象像として統合していくという流れについて表現されているものとして読み取ることが可能である。さらに、向こうの世界は、千尋の対象喪失とその痛みと喪のプロセスを経て、あらたな対象発見へと至るこころの深層で起きているプロセスを視覚化している素材として理解することができるのである。

このような映画仕立てでストーリー性のある素材を、学生の理解を支援するための媒体として用いる場合、まずその中に没入して自己を深く関与させること、そしてその後素材を対象化して理解すること、というカウンセリングのプロセスについても合わせて学ぶことを可能にしてくれる。多くの学生が、この映画を映画館で見ていたが、臨床心理学的な視点から解説することで、学問自体をより身近なものとしてとらえなおすきっかけとなり、自分自身を通して学ぶ、という臨床心理学の視点を取り入れやすい。さらには、映画を新たな視点で見直す、という作業も並行して始まっていく。ただ、ここで述べた筆者の理解はひとつの理解の仕方であって、絶対的なものではない。改めて映画をみるときに、自らの視点からも見直していくことのほうが重要である。

2. 防衛機制について学ぶ：『白雪姫』と投影

防衛機制とは、意識すると不安や不快を感じるような心的内容を、意識しないですむようにするところのメカニズムのことである。このような説明だけでは、多くの学生は知識として知的なレベルからのみ理解することになり、実体験としての納得が得られないままとなる。そのため、自分自身のこととは全く無関係で『病的な心の世界』の出来事として自らの心のこととは切り離してとらえることも多い。このようなときに、多くの人に知られている物語を用いることの意義がある。確かに、防衛機制の中には、分裂や投影性同一化など原始的な防衛機制として位置づけられているものもあるが、健康なレベルの人の心の中でも中心的な役割ではなくとも働いているメカニズムである。カウンセリングという行為は、面接者自身の心を通して相手を理解するという一面があるため、さまざまな知識を単に他人事として理解するだけでは十分ではなく、個人の心の動きとして理解する、ということが必要なのである。そこで、多くの学生が幼児期から読み、時には母親からの“子守唄”として聞かされている『白雪姫』(The Walt Disney Company, 1994)を用いている。

白雪姫は、グリム童話として語り継がれてきているものであり、内容はディズニー版では一部修正されていることも知られている。実の母親は登場せず継母に置き換えられ、グリム童話の最後の場面では、継母の化けた魔女は焼けた鉄板の上で死ぬまで踊り続けさせられる、となっている部分が削除されて生き返った白雪姫と王子様の結婚というハッピーエンドの物語として書き換えられていることも周知のものである。この部分に触れるだけでも、置き換え、分裂、否認、躁防衛などの心のメカニズムについて理解することが可能になるのだが、ここでは映像が主題であるのでこれ以上には触れないでおく。

さて、この物語では白雪姫の母親(継母)が、鏡に向かって世界で一番美しいのはだれかと問いかける場面から始まる。答えは、白雪姫であるので、お妃は怒って狩人の命じて殺させようとする。ところが狩人は、白雪姫を殺すことができずに森へ逃がし、白雪姫は命からがら7人のこびとたちの住む森の中へ逃げることになる。逃げ込んだ森は、初めごく普通の薄暗い森として描かれていたが、奥深く逃げ込んで行くうちに、木の枝は逃げ惑う白雪姫を捕らえようとする化け物の手として擬人化して描かれる。大木のほこらは大きく口を開けた化け物に変化し、川に浮かんでいる朽ちた木は、ワニの姿となって白雪姫に襲い掛かっていく。

この場面は、外界の化け物が白雪姫に襲いかかる場面として描かれているわけだが、臨床心理学的に理解すると、白雪姫の恐怖感が外界に投影されて化け物が白雪姫を襲う、と

いう形で表現されているものとして理解することができる。これが投影という防衛機制を視覚的に表現している部分として理解を容易にする場面なのである。日常的にも、屋外に干している洗濯物が風になびいているところを夜中に目にとると、人が窓の外を歩いているようにも見えて怖くなる、という出来事を例として用いることもできる。この例でも、学生の理解を促しはするのだが、インパクトには欠けるところもある。しかし、自らの心的世界とのつながりを保ちながら学ぶことを視野に入れる場合には、視覚的媒体を提示し、次により身近な例も含めることがより効果的となる場合もあろう。

3. パーソナリティ障害：『危険な情事』（エイドリアン・ライン監督）

ここでは、パーソナリティ障害の中でも行動化の激しい境界性人格障害を取り上げる。理解支援の素材としては『危険な情事』を用いている。この映画は、多くの臨床家たちによって境界例パーソナリティ構造の人物を理解するのに有用であるといわれている映画である。この視点から見る場合には、マイケル・ダグラスの演じる主人公を執拗に追い回す女性を中心において見た場合のものである。

境界性人格障害は、対人関係や自己像、感情の不安定および著しい衝動性によって特徴付けられている。対人関係では、見捨てられ不安や衝動統制の困難さから生じる破壊的な行動などが生じやすいものであるが、映画ではこの点がよく描かれている。たとえば、主人公が、妻の元へと帰ることを相手の女性に告げた直後に、女性はwrist cuttingをする。この自傷行為は、wrist cutting syndromeの特徴の一つとしても取り上げられるものであり、自らの手首を切ることで対象とのつながりを維持しようとする行動という意味のことが指摘されている（Rosenthal, 1972）。この事件の後から、マイケル・ダグラスの職場へ長文のFAXを送りつけ、最後には自宅にまで押しかけてペットを殺害するなど、一時的には理想化されていた「良い対象」が、急激に価値を切り下げられて、「悪い対象」に変化し、『分裂』という原始的防衛機制について、対象関係論の視点から理解することを容易にしてくれる。一人の人の、パーソナリティの両面（良い－悪い）をみるのが困難である、という特徴のひとつがうまく描かれており、具体性のある場面から理解しやすい。

臨床的な概念や状態像について実例を映像として示すことはプライバシー保護の観点からも困難であることを考えると、より一層このような媒体を用いることは有益である。

4. 万能感とその幻滅：『SMAP』のコンサートライブビデオ*

万能感omnipotentとは、すべてが自分の思い通りになる、という感覚のことである。主に乳幼児期に私たちのところを支配している感覚のことであるが、成人においてもその断片はだれしも抱えているものである。講義としては、知的に理解することができれば十分であるが、学生に定義を伝えただけでは十分な理解が得られることは少ない。しかも、多くの学生は自らの心的体験とはかけ離れた出来事として感じる人が多いことは、これまで述べてきた事項と同様である。そこで、自らの体験とのつながりを保つために、ここでは、SMAPのコンサートのライブビデオを視聴する。必ずしもSMAPである必然性はないが、学生にとって共有されたアイドルであるほうが理解は進みやすい。ビデオを見ている段階では、コンサートライブの映像であることもあり、他の映画などの素材と異なり一瞬にしてフィルムコンサートの会場のように興奮し、映像の中に入っていき学生が一部

にいと同時に、妙に白けて見ている学生とがいる。この開きは他の視覚的素材と際立って異なる点である。このような、食い入るように画像を見入るところに、多くの心理学的要素があるわけだが、ここでは万能感という点に絞って述べることにする。

数万人の観客が、舞台の上の5人のアイドルグループと一体化し、そのうちのメンバーの一人が会場にピースサインを送ると、大勢の中にも自分自身にサインを送っているかのようにどよめきたつ場面がある。ここに、自分だけを見てくれる、という万能感の表れをみることができ、さらに、このような光景は、ビデオの至るところに認めることができ、アイドルの動きのひとつひとつにファンが呼応して、歓声を上げる姿を目にすることになる。このような場面のアイドルは、自分ひとりのアイドルであり、自分の思いを汲み取ってくれる存在として位置づけることができる。また、青年期に至り、このような個人にとってのアイドルとなる対象が現れることが多いが、ここには、親との分離による寂しさを埋める存在としての役割も担っており、子どもから大人への橋渡しをする存在ともなるものである。この点は、Blos (1967) がすでに、青年期の第2次分離個体化過程におけるアイドルの役割として論じている。

コンサートであれば、コンサートが終わりを告げることにより、この万能感的な一体感から抜け出て行くことになるわけであり、一時的なものである。つまり、自らの体験がある空間の中において一時的、部分的な退行現象として生じていたことについては十分に認識されているわけであり、そこから醒めることは比較的容易な場合も多い。これは、一種の幻滅の過程を体験として理解することも可能であろう。一時的ではあっても没頭状態にあったところから、日常的な現実の場面へ戻る過程では、醒めることが必要であり、実際には自分の思うままにはならない対象像へのあきらめという後戻り、つまり幻滅を経験するのである。あるいは、一時期は非常に入れ込んでいたアイドルが、年月がたつうちに全く関心のないものとなって見向きもされなくなっていく、という過程にも生じていることである。これは、授業の中では、学生自らがコンサート会場にいるかのようにのめり込み、興奮状態にあったところから、途中でビデオを止められて急激に気分が醒めていく、という過程とも重なるものである。そのため、「今ここで」の体験を通して理解をすすめることをいづらか可能なものにもするのである。

(*株式会社ジャニーズ事務所出版・ビクターエンターテイメント株式会社, 1997)

5. 臨床心理学的視点を学ぶ素材：『サザエさん』（長谷川町子作）

ここでいう臨床心理学的視点というのは、実際のカウンセリング過程の中でカウンセリングをおこなう面接者に必要な視点のことである。それは、物事を単に現象レベルでとらえるだけではなく、さまざまな角度からその事象をとらえ、事象の起きた文脈や背景にも思いを馳せることのできる視点のことである。つまり、表立っている行動にばかり目を奪われない視点のことである。この視点がカウンセリングには必要なのである。実際の臨床場面に事例として持ち込まれることの多くは、何らかの行動や形となって表現されている「問題行動」からカウンセリング場面を訪れることになる。このとき、家族を含めた多くの関係者や当事者は、表立った問題行動にばかり目を奪われている状態にあり、そのような行動へ至らざるを得なかった経緯や流れなどが見落とされることになる。そのため、当事者の気持ちや意図はいつまでも汲み取られることなく見落とされることになる。

たとえば「乱暴な子ども」「教師のことをきかない子ども」「家庭で暴力を振るう子

ども」などなど、対象となっているある個人の特定の『問題』行動だけが取り上げられて話題にされることになり、このような個人に対する見方（表現）は一人歩きして語り継がれ、他者からも同様の評価（ラベル）を受けることになる。つまり、個人に対する先入観を形成するきっかけともなりうるのである。その結果、ラベルをつけられた個人はますます傷つけられ、わが身を守るためにも同様の行動を繰り返すことになり、またその行動を正当化することになる。このような、不適応的な繰り返しを避けるためにも、行動を行動レベルだけでとらえるのではなく、その意味を理解するための視点が必要となる。行動の意味が理解されるとき、行動の意味がわからないことから生じる周囲の人々の不安感も減少し、本人を理解する心理的なゆとりが生まれることになる。

このような視点を言語的に説明することは可能であるが、視覚的な素材を用いることでより実感のあるものとするのが可能になる。このような素材として有効なもののひとつとして、『サザエさん』（長谷川町子著）の映像を提示している。

すでに多くの人に人が内容にも精通しているマンガであるが、1話、約15分をビデオ鑑賞した後、「磯野家」の間取りを描いてもらう。多くの学生は、これとカウンセリングとの関連性がわからず当惑する。さらに、多くの学生は、マンガのストーリーを見ているわけであり、背景である間取りなど見ていない。ただ「国民的な」番組であるので、幼児期から多くの学生が見ているので『すぐに間取りくらい描ける』と豪語するものもいる。しかし、その割には、描けないという結果になることが特徴である。各自が描いた後に、間取りの正答を示し（実際の資料については、東京サザエさん研究会編『磯野家の謎』が参考になる）、筆者がこのマンガを取り上げた意図を示すことにしている。この時点では、学生たちは、このような表の出来事に目を奪われやすいこと、そしてその背景が目に入っていないという事実をこの題材においても自らの「今ここで」の出来事として認めることができ、体験的に近いところで理解できるのである。

Ⅲ おわりに

本稿では、5つの視覚的媒体を具体的に例示して、臨床心理学的視点や概念を講義においてより理解しやすいものとするために用いることについて論じた。すでに、Freud自身が用いた概念やモデルは、多くがメタファーであったことが指摘されており、このころのことを理解するために視覚的な媒体や置き換えられた素材が用いられてきた歴史は長いものである。臨床心理学は、カウンセリングなど人間のころろについて理解を深め、援助の基礎理論となるものであるが、ともすると自らの心理的な世界と切り離し、まるで他人事のように『病的な』心の世界のための理解の学問として学生には受け止められやすい。そこで、より身近な題材を用いて示すことにより、過去の論文や書物の中だけの出来事ではなく、自らの日常生活の中で自分自身の心の中にも同様に起きているメカニズムであることを実感に近いところで理解することを可能にできる。この点が、視覚的な媒体を用いることの効能となる。

その際に、ひとつの素材を用いてさまざまな心のメカニズムや状態について示すことも可能であろうが、それぞれの概念や事象を説明するにあたって、その概念や事象がより明瞭に描き出されている素材を用いるほうがよいであろう。これは、飽きがこないということもあり関心を維持しやすいこと、さらに、特定の素材の中だけに臨床心理学的な事象が表現されているのではなく、私たちの関わっている日常的なことがらの中に読み取ること

ができる，ということを知る意味でも有用である。しかし，ときにこちら側の解釈の押し付けとなりうる可能性も含まれるため，学生自身の実感や体験と照らし合わせて考えてもらい，感想や意見を述べてもらう必要がある。これにより，一方的な解釈の押し付けとなる可能性は防ぐことができる。もしも，多くの学生の理解とそぐわない場合には，こちらが理解を修正しなければならない。しかし，この過程は，講義自体を相互性のあるものにするということでもある。このように，心的な事象は，唯一絶対の正解があるわけではないため，さまざまな角度からとらえてみるのがより一層重要であるともいえる。さらに，臨床場面でカウンセラーがクライアントに伝える理解は，あくまでも仮説的なものであり，クライアントとカウンセラーの相互のやりとりの中で，より確かなものへと修正されていくものであることを考えると，講義での媒体の提示に際してもひとつの理解の視点や例示といった程度のものであることを学生との間にも共有しておくことは意味のあることである。

講義という場において視覚的媒体を用いることは，受講している学生の関心を引き付けやすいが，一部の学生にとってはあまり関心のないこともある。さらに，授業を受けている自らの心的体験として理解を可能にする一面もあるが，個人の受け取り方はさまざまであるので，ある視点を提供することで，ひとつの視点に縛るといった側面も合わせ持っている。臨床心理学的視点の重要性は，とらわれすぎずに物事をみようとするということとして考えると，弊害ともいえる側面である。この点には，留意が必要であり，この短所ともいえるべき部分を認識した上で用いればよいのである。

文献

- Blos, P. (1967) : The Second Individuation Process of Adolescence. *Psychoanalytic Study of the Child*. 22, 162-186.
- Freud, S. (1907) : Delusions and Dreams in Jensen's *Gradiva*. S.E. 9.
- 川谷大治 (2001) : 思春期と家庭内暴力. 金剛出版.
- 北山 修 (1988) : 増補・悲劇の発生論, 金剛出版.
- 北山 修 (1991) : 精神分析理論の諸特徴について, 九州大学教育学部紀要, 第 36 卷, 第 1 号, 37-44.
- 北山 修 (2001) : 幻滅論, みすず書房.
- 宮崎 駿 (2001) : 千と千尋の神隠し, 徳間書店.
- Spence, D. P. (1987) : *The Freudian Metaphor. Toward Paradigm Change in Psychoanalysis*. W. W. Norton & Company. 妙木浩之訳 (1992) : フロイトのメタファー : 精神分析の新しいパラダイム. 産業図書.
- 東京サザエさん学会編 (1992) : 磯野家の謎 : 「サザエさん」に隠された69の驚き, 飛鳥新社.
- Rosenthal, R. (1972) : Wrist-Cutting Syndrome. *American Journal of Psychiatry*. 128, 1363-1315.
- Winnicott, D. W. (1971) : *Playing and Reality*. A Tavistock/Routledge Publication.